

イメージの生成

亀 田 満

The Genesis of Image

KAMEDA Mitsuru

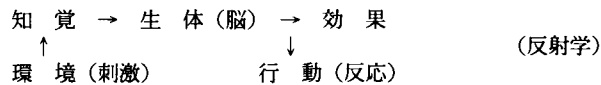
「あるつぶやきが生れる瞬間、そのままにそれを伝えることは誰にもできないのではないか、混沌から生れたわれわれは招こうとする対象と結びつくことができず、それを目にしたとたんわれわれの視線のもとで秩序が…そして形が生れてしまうのではないだろうか。」(「コスモス」ゴンヴロヴィッチ, W. 1967)

I 問題の所在

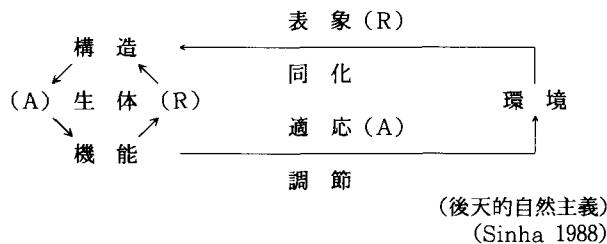
「森の出口」について吉田(1987)は現象学的に多様な規定性、可能性について考察している。「森の中で、その人が置かれたさまざまな状況により、『森の出口』はさまざまに変わりうる。そして、そのさまざまに変わりうる根拠は、森の『閉じていると同時に四方に向かって開いている』性格にあり、その森を『生きられた空間』として体験する人間の多様な可能性にある。」また同じ事が、「心理学の森」にも言える。この認識を前提として、問題は、もう一つ掘り下げたところ、即ち、「森」「の」「出口」を問題状況として生み出すところにあるのではないと思われる。そして、この点において、イメージ(正確にはイマジネーション)は、単なる図像でも、命題の陰でもない、生成の力と成るのである。「ハエとり壺からハエを出してやる」ことによって哲学の解体をめざした(あるいは、事実上として)ヴィットゲンシュタインに倣えば、問い掛けのゲームの外に立つこと、換言すれば、知の枠組(エピステマー)を考察することが求められている。

本論に入る前に、心理学的方法論の概観を行なう。行動科学的心理学については、鯨岡(1986)など現象学からの批判をしているが端的にいうと「主観的なものの『客観的』学」(フッサール, E 1980)という、主体の喪失が問題である。相対的に見れば、主体、客体、媒介物(道具、言葉、身体、社会、その他)の三項が、それぞれ中心になって、超越論的、自然科学的、記号論的、唯物論的、認知科学的、心身一元論的モデルなどを形成しているということである。後述するように三項を前提とすることは、分析的、デカルト的知を背景にしてのことである。言語学についても、同じく、竹内(1985)が述べているように、ソシュールには名、言語機能、物、オグデン＝リチャーズには象徴、指示、指示物といった明示的な三項関係はあっても、含意性を

含み込んだ〈言語場〉そのものという視点が欠けている。意味の場については、Kittay, E. F. (1987) がメタファー理解に適用しているが、認識論を欠くため、静的アプローチになっている。パラダイム論的には、Sinha, C. (1988) に従えば、行動主義のあとに、Fodor に代表される認知科学の新理性主義 (neo-rationalism), Baldwin, Bateson, Waddington, Piaget に代表される後天的自然主義 (epigenetic naturalism) が対置される。



計算規則 → メンタル・モデル → 参照情報 (認知科学)



この第三のパラダイムに、開かれた系にあって、自己組織化を行なう主体が見出される。Sinha は、文脈を含んだ理解について、興味ある考察をしているが、意味作用、主体の生成について、Barthes, Kristeva の示唆にとどまっている。最後に、知の状況として、ポスト・モダンティと、それに相即する形で、一次元化の問題がある。「思考は、数学、機械、組織といった物象化した形をとって、思考を忘れる人間に復讐をとげる。」(ホルクハイマー, M.・アドルノ, T. W. 1990)あるいは、高度に発達した大量消費社会において、「教化は生活様式になる。…そして良い生活様式として、それは、質的変革に逆らう。こうして一次元的な思考と行動のパターンが現われる。そこでは、その内実において既成の言説と行動の世界を超越する観念、願望および目標は、斥けられるか、この世界で通用する意味内容に変えられる。」(マルクーゼ, H. 1980) 科学的方法においては、これは操作主義、行動主義の形をとって現われる。一方、「われわれは、理性的人間 (ホモ・サピエンス) と狂気の人間 (ホモ・デメンス), 生産的人間, 技術的人間, 建設的人間, 不安的人間, 享樂的人間, 恍惚的人間, 歌い踊る人間, 不安定な人間, 主観的人間, 想像的人間, 神話的人間, 危機的人間, 神経症的人間, 性的人間, 過剰的人間, 破壊的人間, 意識的人間, 無意識的人間, 呪術的人間, ヒトがそこで決定的に人間に変化する多数の面をもった一つの顔の人間, を結び合わせなければならない」(モラン, E. 1975) のである。ポスト・モダンの状況とは、上述の様々な顔が、勝手に語り出しているということである (ポリフォニックな世界)。求められているのは、それぞれの意味作用・その中心 (特異点), 逃走線 (ドゥルーズ, ガタリ) を跡付け、生成の契機とすることである。本論では、イメージ/思考の生成について Morin, E.を中心に、Castoriadis, C., Deleuze, G., Serres, M.に通底するものを、考察する。

II 認識の認識：複合性のパラダイム

デカルト的思考は言うまでもなく、疑いえない主体に始まり、対象の細分化、そして全体性への総合を行なうことに代表される（デカルト，R. 1974）。そこに含まれている要素主義的、一義的体系化（単純化）は、存在・実存・生命の豊かさ・多様性を排除するものである。実際、科学の発達には、次のようなマイナス面がともなっている。

1) 知の仕切りと細分化，2) 自然科学と人間科学の乖離，3) 人類社会科学諸部門における、人間・個人・社会についての総体的概念の崩壊，4) 科学的知の無名化，5) 科学的知の脅威化，6) 経済的・政治的権力への集中（個人の無力化）（モラン 1988）こうした危機にたいし、モランは、一連の「方法」において、極めて、先鋭、かつ独創的に、パラダイム変換に取り組んでいる。

「古典的科学性に固有の了解可能性原理—それらはたがいに連結しつつ、宇宙（物理学的・生物学的・人類=社会的）を単純化するひとつの概念形成を産出する—からなる全体を」（同上）単純化パラダイムと名づけ、それにたいし、それぞれの実体の単一性/多様性を概念形成させるものとして複合性パラダイムを呈示している。これは、次の三つの原理を中心としている。（Morin 1990 (a), (b)）

- 1) 対話的原理
- 2) 回帰的原理
- 3) ホログラム的原理

以下、それぞれの原理について検討を加えることにする。

1) 対話的 (dialogique) 原理：不可分の相補的、競合的、かつ、敵対的な二つの原理の連合。これにより弁証法的発展の契機を含みつつ、第三の原理、体系へ収斂させず、生成過程を内包することになる。確かに、形式化（命題化）にあたって、諸事象を通底する抽象（大文字のシニフィアン）は、不可欠ではあるが、自身を語る（命題の命題、認識の認識、生成、ドゥルーズの「第4の意味」）時には、ゲーデルの不完全性定理を免れない。つまり、意味論的ツリー構造を横断しなければならない。また、イメージ（メタファー）を扱うときにも、同じく、命題化を逃れる（はみ出す）ものが、主題となる。つまり存在論的にも、また、認識論的にも、二重の意味をもつのである（「自己」と「自己を語る自己」）。これは、今村（1989）の第三項排除効果に、またロトマン，B.（1991）のゼロの記号生成に通じるものである。「形式論理は、欠性的に、陰画的に、第三項排除効果を示唆し、弁証法的論理は第三項排除効果を積極的に有機的に組み入れる。思考の論理は、一般に、第三項排除効果と何らかの形で連絡しているといわなければならない。」「元になったものから閉域へゼロ/変数、消点/小点、信用貨幣/有価証券—というこれら脱構築的な運動は先行性が喪失したことを自ら宣言する。」後者は、近代のエピステメの成立に焦点が与えられているが、前者は、カオス→組織・制度・体系→カオスの契機がより一般化されている。第三項が支配的になれば、ヘーゲルの理性、あるいは、教条化したマルクス主義、その他の、イデオロギーに堕ちてしまう。Serres（1991）の言葉で言えば、太陽の光が強すぎるところでは、砂漠化してしまうのである。

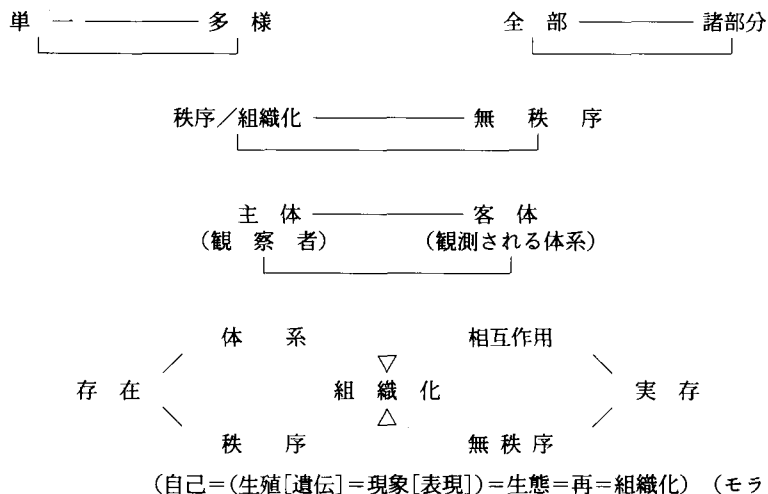
対話（二重の論理）に即して言えば、現象あるいは意識の地平に、対象あるいは主体が現われ

るときには、地—図，内—外，命題 P—「P，焦点的一副次的（Polanyi, M），中心—周辺の境界面を形成しているのである。

特に生成との関わりにおいては、「出来事」という観念が、キーワードとなる。「生成の変化とは、可能性から現実性への移行」（キルケゴール，S. 1979）であり、「生成それ自体の内部における可能性」（同上）そこにおいてこそ、「時間にたいして弁証法的関係に立つ厳密な意味での歴史の世界が開かれてくる。」（同上）複合的な体系は、「偶発事的で、予見できず、低確率で、特異で、具体的、歴史的な性質をもつ」（モラン 1988）「出来事にむかっていますますます開かれていく迎え入れ構造であり、また構造への感度がますます高まっていく構造なのである。」（同上）その体系は、「内奥に、対立的両極性を一ひいては二重の連結回路—含んだ体系」（同上）になる。

ここでもう一人の、「多様性」の思想家 Deleuze が交差してくる。ルイス・キャロルのパラドックスを巡って、深層の生成変化の、表層化を考察している（ドゥルーズ，G. 1987）。ストア学派の言語観によれば、事物の属性は、出来事、動詞、存在の仕方によって生まれる。存在は、物体の深層の力と、表層の非物的な存在の無限な多様性（シミュラクル）に分割される。それに、ニーチェ（生成のカオスの多様性）、アルトー（器官なき身体）を加え、未分節な深層の力による、表層における現われ（裂け目）を記述している。同質なものを総合して一つのセリー（命題化の秩序のもとあって）が構成され、これは常に、二つ（本質的には、多）の異質なセリーに収束もしくは分岐する（序ながら、「Mille Plateaux」では、地層（strate）に変わり、リゾーム性を強めている。）。「構造には必ずセリーがあり、それぞれのセリーの関係項のあいだのつながりがあり、このつながりに対応する特異点がある。そして特に、構造には空いた目があって、それがすべてを機能させている。」（同上）「特異性は、本質的に前個人的であり、非人称的であり、無概念的である」（同上）がゆえに、パラドックスにも、常識（共通感覚）にもなる。まさに、これらのセリーの揺らぎのなかに、特異点を中心として、意味が生れてくる。ここにモランとの共通点をみるのである（諸セリーの結合・解体における諸論理の交通）。

具体的に述べると、Morin の呈示するものは、下図のような、諸項が、一つの関係、環（バックル）のなかで生成・解体するものである。（モラン，E. 1988）

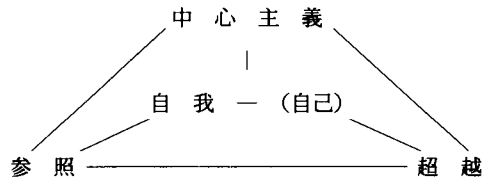


諸項は、陰陽のように、相補的 不可分であって、かつ流動的に相互作用を行なっている。超複雑性 (hypercomplexité) として人間の認識については (Morin 1986), 例えば, 「理解」と「説明」, 「経験的/合理的」と「象徴的/神話的」の環が次のように構成される。



こうした対話 (二重の論理) のうち, 片方の論理が欠如することにより, 例えば, 帰納/演繹では, 不当な一般化あるいは同語反復, 類似/論理では, 恣意性あるいは創造性の欠如, が生じる。対話は, まさに, 自律した個人間のものであり, 一方的な教え込み, 受容を否定するものである。また, 言語においても, 範列, 連辞の二つに軸が, 交差し相補的に働いている。「あらゆる人間の言語は, メタファー的 (類似的) であり, かつ潜在的に包括的, 命題的 (論理的)」 (同上) である。

2) 回帰的 (récuratif) 原理: あるプロセスにおいて, その生産物と効果が, プロセス自身の生産, 因果関係に必要とされるもの。「回帰性・生成性・自己の生産・再産出, そして (結果的には) 再組織は, 同じ中心的現象の同数の側面なのである。」 (モラン 1984) 物理学の世界において, コスモス物理学原理 (無秩序→相互作用→秩序と組織) と熱力学第二原理 (秩序と組織→無秩序) が相即する形で自己組織化を行なう。これは, プリコジン (1987) も, 考察しているし, また生物学的には, ヴァレーラが, 自己創成 (オート=ポイエーシス) に固有なものとして, self-reference・再入場・回帰性を提案している (モラン 1988)。モラン (同上) は, さらに自身 (soi) と自己 (autos) を区別して前者に, 物理学的, 後者に生物学的現象を充てた。そのことにより, 1) 自己 (生殖=現象), 2) 伝達の/計算的自己組織化, 3) 対自と自己中心主義, を内包する生物の自律性が, 浮び上がらせた。具体的には, それぞれの環 (boucle) の矢印が, この回帰性であるが, ここでは, 特に, そこから生じる主体の形成を取り上げることにする (Morin, 1980)。



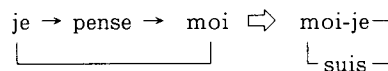
(Morin 1980)

a) 自我—自己—中心性

原生動物の、防衛、捕食、生殖における、自己—他者の環（包摂—排除）から、双子における、個体意識（ipséité）までの、客観的（遺伝的、生理学的、形態学的、心理学的）そして何よりも、主観的、特異性に存する。

b) 自我—自己—参照

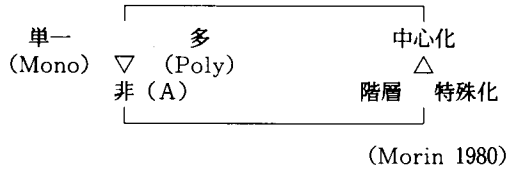
a) に相即して、自身（soi）/非自身（non-soi）の弁別をすることであり、また、他者—参照を含むものである。デカルトの「我思う故に我あり」は、



となったものである（同上）。このループは無限遡行となる。Laing, R. D. (1971) の反響し合うリフレインのゲームのように。あるいは、まさに「地下室の手記」（ドストエフスキー、Φ. 1969）の主人公の、絶え間ない、自己否定の独白、仮想の読者との対話。「…なぜといって、人間のしてきたことといえば、ただ一つ、人間がたえず自分に向って、自分は、人間であって、たんなるピンではないぞ、と証明し続けてきたことに尽きるようにも思えるからだ。」

他者—参照については、自己—環境—組織化（auto-éco-organisation）に不可欠である。「主体は、自己中心的であると同時に、現実主義者である。」（Morin 1980）しかし、主—客の境界面では、その区別はなくなる。セール（1983）の例えでは、「私がしかじかの概念を考えると、私は完全にその概念である、私が木を考えると、私は木であり、私が河を考えると私は河で」ある。「私は一般的に考える、何でも私は考えることができる。私は考える、ゆえに私は無限定である。…私は考える、ゆえに私は『誰でもない』。」

c) 自我—自己—超越「主体は、その宇宙の中心に身を置きつつ、自己の環境のレベルを越えて、自らのために、現実の秩序や、他の存在者の在り方の質を越える。」（Morin 1980）主体は、両価的境界面において、真/偽、有用/有害、善/悪の間に、価値を配分するという、論理—倫理的（logico-éthique）性格が付与されているのである。ヤンツ、E. (1986) の言葉によれば、「倫理は進化とともに進み、原則として、広く開放的に展開し続けるものだ……生をとおした道德の直接経験は、倫理の形をとって表現される。…そして蓄積された倫理的情報は、そののち選択的に検索され、現実の生活の場で道德プロセスに応用される。」ここで忘れてならないのは、第三のレベル（第一が、単細胞のレベル、第二が、多細胞のレベル）、多細胞生物の社会である（Morin 1980）。



各生物体の構成する社会は、蜂や蟻の巣の形成・解体から、資本主義社会における、企業の統廃合に至るまで、上図のような、秩序—無秩序の契機を含むものである。さらに、人間社会は、自然に従いつつ、自然を、改変し、人間的な自然を造ってきた。「われわれヒトという種は唯一度生まれたのではなく、二度生まれたのである。…第一の誕生は、ヒト属の範囲内で、例外的なものを普通のものにし、拡散しているものを集中しようとする、独特な動物の誕生である。…第二の誕生において、他の種から借用した潜在性、方式、手段を頼りにして、自分で総合し、作りだした潜在性、方式、手段を発達させる。」(モスコヴィッチ, S, 1984) 加えて、人類が、地球の表面をうろついている間は、圧倒的な自然の脅威あるいは豊饒さにたいして対峙的に、闘うあるいは搾取することが許されたかもしれないが、Serres (1990) の言うように、地球の環境を変えるまでになった今日、即ち、「自然全体が、我々の歴史に、参入している」状況では、近代を支えてきたイデオロギーに依拠できなくなっている。



主体の形成に戻れば、もう一つの、重要な環、意識⇔概念化、が残されている。この環において、自然・社会的環境、自己・他者、ノエマ・ノエシスが、交差する。思考において、心像と概念は、相補的な方向づけをもつ。「一方の側の心像は、思考を物の感覚的すなわち物質的な側面にもとづかせ、他方の側の概念は、この感覚的なものを物の原理、つまり物の瞬間的な外観を超越し、物を存在させるものにもとづかせるのである。」(ワロン, H, 1983) また、人間の言語は広松 (1979) が言うように「物的世界像」から「事的世界像」への、物象化、その背景として、共同主観性の契機を含むものである。「まさしく、『言語』的交通を通じて、認識主観の『同形化』が進捗する次第となる。そして、認識主観としての同形化とも相即的に、言語活動の主体が当該言語体系・意味体系の『共有者』として自己形成を遂げるかぎり、一方では、当該の『言語』なるものが恰かも有体の諸個人を離れて自存するかのごとくに物象化された相で表象され、これがイデアリジーレンされるとともに、他方では、当該『言語』の主体なるものが、これまたイデアリジーレンされる所以となる。」これは、確かに一面の真理であるが、主—客を両極化することによって、その否定的契機（あるいは、関係性への還元）を与えるものである。竹内 (1984) が、批判しているように、「主体と客体、ノエシス・ノエマの関係はけって対極的に固定化されたものではなく、そのつど相互に交替し合う動的な弁証法的構造をもっている」のである。この構造を、成立させているものは何か、竹内 (同上) は、デリダの「差異の戯れ」を批判するなかで次のように述べている。「音声言語で顕在化しているデジタル型の差異性と、archi

—écritureで確認されるアナログ型のアイコン性との双方の基底にあって、その双方を同時に成立せしめるものとして、人間存在を根底的に規定している〈想像力〉の存在」，これによって、構造主義の、スタティックな形式、構造を乗り越えることができる。「この〈神の恵みの最も薄い生物〉がおのれの生産的想像力によってみずから環境とのあいだに張りめぐらせた幻想の網—それがまさしく人間固有の〈表象的次元〉であり〈象徴体系〉なのだ。」(竹内 1981) こうしてイメージの生成の核心に近づくことになる。竹内は、〈想像力の文化記号学〉によって、パラダイム変換に取り組むのであるが、〈homo demens〉としての人間観をふくめた、認識論的枠組に、モランとの、また、それ以上に、人間を〈想像上の制度〉とみなす Castoriadis との類縁性が見出される (サルトルからの出発、人間性の解放に向けて、根元的想像力を認める点で)。筆者の関心も、まさに、この点にある。「意識は創造力をもったものとして現われるが、この創造的性格を対象物として措定することはない。この漠然とした見逃され易い資質のおかげで像の意識は海のうえに浮ぶ木片のようなものとしては、現われず、多くの波の間の一つの波のようなものとして現われる。それはつねに自己を意識し、それに先立つ他の意識と等質であり、それら他の意識と総合的に結びついている。」(Sartre, J.-P. 1940) この波が、いかなるものを浜辺に打ち寄せてくるのか。時に、死骸、難破船 (航海の途中に、修理をし損ねて)、時に、美しい貝殻、潮騒の彼方のサイレンの声であったりする。この海において、概念を、豊饒なまでに産みだし、あるいは、枯渇させ、思考に翼を与え、あるいは、地を這わせるものが何であるのか。「科学の真の目的は機能を創出することであり、芸術のそれは、感覚可能な集積物を、哲学のそれは、概念を創出することである。」(Deleuze 1990)

最後に、この基底にある想像力について、Castoriadis の考えを簡単に、辿ることにする。先ず、集合 (ensembles) とマグマ (magma) の二つの論理に分けられる (Castoriadis 1986)。

A) 集合：〈定義〉、〈範疇〉を基底に持つ。操作の原理； 1) 同一性、無矛盾、第三項排除の原理 (これは、第 N 項まで拡張される) 2) 同値性 属性≡クラス 3) 諸同値関係により確証される存在 4) 良い秩序の諸関係により確証される存在 5) 決定性。

人間が世界に関わるときには (想像的なものが、現実化するときには)、次の二つの形態が表裏一体となって、現われる (Castoriadis 1975)。

a) レゲイン (legein)：語ること、言語表象、logos、…としての価値 (le valoir comme)、コード；識別し、選択し、措定し、集め、計算し、語る。

b) テウケイン (teukhein)：行なうこと社会的行為の機能、道具的次元、テクネー、…のための価値 (le valoir pour)；集め、調整し、構成し、組み立てる。

両者は、ちょうど、貨幣の交換価値/使用価値、言語学における意味論/語用論の関係に等しい。これらは、内に、因果、目的—手段、論理的包含の関係をもつものである。実は、これらが、上記の集合の作用のなかにあるということは、厳密に言って、同語反復である。なぜなら、「集合の作用」の規定それ自体がレゲイン、テウケインから発展したものだから (上部構造、あるいは、神学・論理学のシュミュラクルとしての諸学問領域)。ある意味で、これこそ、自己参照性を示すものかもしれない。主—客の生起における反射性、類似性として。即ち、意識されるときは、既に…という概念化 (一次処理) を通過している点で。

B) マグマ：あまり秩序化されていない全体性、部分集合に、分解できず、集合論的同一性

の論理に従うことができない。社会的なもの (le social), 想像的なもの (l'imaginaire), 無意識。

M 1; M が一つのマグマであるなら, M のなかに無限の諸集合を見出せる。

M 2; M が一つのマグマであるなら, M のなかに M とは異なる諸マグマを見出せる。

M 3; M が一つのマグマであるなら, M の諸マグマへの分割は存在しない。

M 4; M が一つのマグマであるなら, M の諸集合への分解は残余として一つのマグマを残す。

M 5; マグマでないものは, 一つの集合かあるいは何物でもない。

多様性の原理

D 1; D のなかに空でない諸集合の, 一つの系が見出されるなら, D は一つの多様性と呼ばれる。

D 2; N が D のなかで見出された諸集合の一つの結びであるとする。

$D - N = \emptyset$ なら, D は一つの集合である。

$D - N \neq \emptyset$ なら, D は一つのマグマである。 (Castoriadis 1986)

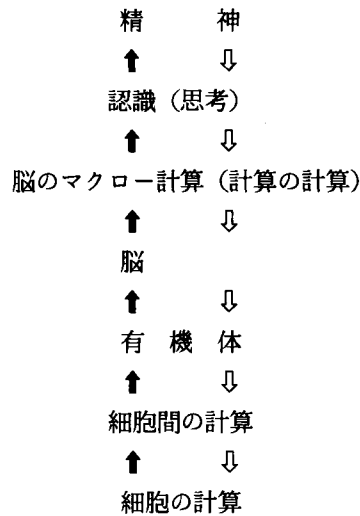
同じく, Castoriadis (1990) によれば, 人間の主体性 (subjectivité) は, 幼年期の無意識によってモナド的核心を形成するが, やがて, 社会の心的なものの変容から産み出され, 言語を利用し, 社会的に構成された個人 (単一の, 身一心から多次元的に社会的に規定された特性) を作るようになる。さらに, 真に人間の主体性が, 反省性 (réflexivité) と, 熟慮に基づいた活動 (意志) によって, 形成される。

社会についても, その自己組織化は, 社会によって規定された一つの制度が, 自己性 (soi-même) を保持するかぎり, その社会は自己のうちに留まり, 自己の世界や解釈の諸体系を構築する (あるいは, 異質な解釈の諸体系を拒絶する) 場合がある。また, ある種の反省, 熟慮した活動能力を自らに与える社会もある (状況への参加によって状況の創造的発展)。こうした, 人間の主体性, 社会の力動性を高めることで, マグマの持つ豊かさを現実のものとするができる。

創造性については, 科学史的にも, 時間論的にも興味ある考察がなされているが, テーマが大きすぎるので省略することにする (Castoriadis 1986 1990)。

3) ホログラム的原理: 部分が, 全体のなかにあるだけでなく, 全体も全体として部分のなかに見出される。多細胞生物の一細胞には, 生体の遺伝情報の全体が含まれ, 個人のなかには言語, 文化, 規範, 基本的禁制などにより社会全体が含まれている。この原理により「全体のなかにある個人を, 他の個体との, 全体との関係によって理解すること」(Morin 1990) ができる。これは, 全体主義への還元ではない。全体と部分の相互の参照性「多元総体にむかって開かれた多重単位という複合的概念」(モラン 1988) を示しているのである。これは, Deleuze (1988) の〈折り返し (pli)〉, セールの〈網目上組織〉に相即している (何れも, 反デカルト的立場を取っているライブニッツにその淵源が求められるのであるが)。「諸モナド間の相互的な関係の網の目は」, 「長さがゼロの複数の辺一周関係をもった, いたるところに, 現前する頂点—中心」(セール 1985) (Deleuze の〈出来事〉, 〈特異点〉) を内包している。「残る問題は異なる様々な舞台を貫通するアナロジーを探究し同一の関係の一致を求めることであり, 相互表出性と類同性の探究である。」(同上) 具体的には, これまで述べてきた環の形成そのものが, いくつもの窓を

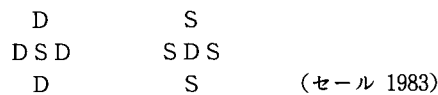
もったモノイドと考えられる。認識の環を垂直に取ると、つぎの類同性が示される。



(Morin 1986)

同様なことが、〈類似場の階層性〉として、リードル, R. (1990) によって、示されている。「類似性と変態の原因はシステム自体のうちに存在しており、それ自らの法則性に従って調和的に変化していくのである。」

一方、認識の環を水平に取ると、単細胞生物の逃走、捕食における、多様な方略、精神のもつ多様な世界観は、それぞれ、モデルとその変異体を構成している。問題は、垂直、水平を問わず、一つの中心の、再生産であるか（一次元化）、多中心の、生成であるかである。セール (1977, 83) に従えば、前者は、下図のような S（システム）による、D（分布）の支配、後者は、D による S の構成である。



Ⅲ イメージのダイナミズムを求めて

今、人間性、あるいはガイアを射程に入れたパラダイムを求めることは、荒れ狂う大海にオデュッセウスのごとく、船出することであり、また、吹き上げるマグマから、プロメテウスのように、火を持ち帰ることである。地図は、未だ輪郭しか捕らえていない。全体の流れとしては、Gebser, J (1986) が述べているような、(古代的, 呪術的, 神話的, 精神的に続く,) 統合的 (integral) なレベルに来ている (尤も、これは、第二次世界大戦の終了直後に出されたものであるが、極めて洞察・希望に満ちたものとなっている)。この特色は、四次元的、非遠近法的、時間・空間から自由であり、球、透明 (Diaphanität) で現在化 (Gegenwärtigende), 思考としては、具体化、統合、保持 (wahren), 透明性をもとに、非理性的、非因果論的、全体化の

方法を取り、多次元的、開かれて、自由な、世界保持を行なうものである。物理学の立場からは、ボーム、D. (1986) が、「流動運動する分割不可能な全体性」を巡って、「流態 (rheomode)」の言語様式を呈示しているのも参考になる。

人間の発達に関して言えば、直線的なものでも、一つのヒト種へと、収束 (自己の完成) するものでも、社会と切り離されて、元型の顕在化を俟つものでもない。恐らく、発達の諸契機においては、「網の目」、「特異点」「クレオド」(ウォディントン, C) にあって、飛躍が行なわれるのであろうがその一点の時は、一瞬のうちに、無限の可能性を秘めており (それに応じた、無数の状況が存在する)、現在を生きることは、まさに創造の時 (これを、Castoriadis は、〈カイロス〉、Deleuze は〈アイオン〉と呼んでいる) を生きることである。この時を支えるもの、それが想像力である。そして、何よりも、この、世界 (他者) と主体を交通させる想像力を育てること、そのベクトルの可能性を探ることが、心理学、教育学にも求められているのではないだろうか。

引用文献

- ボーム, D., 井上忠・他 (訳) 1986 全体性と内蔵秩序 青土社
 Castoriadis, C. 1975 L'institution imaginaire de la société. Seuil
 Castoriadis, C. 1986 Domaines de l'homme. Les carrefours du labyrinthe II. Seuil
 Castoriadis, C. 1990 Le monde morcelé. Les carrefours du labyrinthe III. Seuil
 デカルト, R., 野田又夫 (訳) 1974 中央公論
 Deleuze, G. 1969 Logique de sense. Minuit (宇波彰・岡田弘 (訳) 1987 意味の論理学 法政大学出版局)
 Deleuze, G. 1988 Le pli. Minuit
 Deleuze, G. 1990 Pourparlers. Minuit
 ドストエフスキー, Ф., 江川卓 (訳) 1969 地下室の手記 新潮社
 Gebser, J. 1986 Ursprung und Gegenwart. Gmb H & Co. KG
 ゴンヴロヴィッチ, W., 工藤幸雄 (訳) 1967 コスモス 恒文社
 広松渉 1979 もの・こと・ことば 勁草書房
 ホルクハイマー, M・アドルノ, T.W., 徳永 恂 (訳) 1990 啓蒙の弁証法 岩波書店
 フッサール, E., 細谷恒夫 (訳) 1979 ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学 中央公論社
 今村仁司 1989 排除の構造 青土社
 ヤンツ, E. 1986 自己組織化する宇宙 工作社
 キルケゴール, S. A., 榊田啓三郎 (訳) 1979 哲学的断片 中央公論社
 Kittay, E. F. 1987 Metaphor. Clarendon Press Oxford
 鯨岡 峻 1986 心理の現象学 世界書院
 Laing, R. D. 1971 Knots. Penguin Books
 マルクーゼ, H., 生松敬三・三沢謙一 (訳) 1980 一次元的人間 河出書房新社
 モラン, E., 古田幸男 (訳) 1975 失われた範列 法政大学出版局
 Morin, E. 1980 La vie de la vie. La méthode (t. 2) Seuil
 モラン, E., 大津真作 (訳) 1984 方法 1 自然の自然 法政大学出版局
 Morin, E. 1986 La connaissance de la connaissance. La méthode (t. 3) Seuil
 モラン, E., 村上光彦 (訳) 1988 意識ある科学 法政大学出版局
 Morin, E. 1990 (a) Arguments pour une méthode. Colloque de cerisy. Seuil
 Morin, E. 1990 (b) Introduction a la pensée complexe. ESF
 モスコヴィッチ, S., 久米博・原幸雄 (訳) 1984 自然と社会のエコロジー 法政大学出版局

亀田：イメージの生成

- プリコジン, I.・スタンジェール, I., 伏見康治・他(訳) 1987 みすず書房
リードル, R., 鈴木達也・他(訳) 1990 認識の生物学 思索社
ロトマン, B., 西野嘉章(訳) 1991 ゼロの記号論 岩波書店
Sartre, J.-P. 1940 L'imaginaire. Gallimard (平井啓之(訳) 1967 想像力の問題 人文書院)
Serres, M. 1977 La distribution. Hermes IV Minuit
セール, M., 及川馥(訳) 1983 生成 法政大学出版局
セール, M., 竹内信夫・他(訳) 1985 ライブニッツのシステム 朝日出版社
Serres, M. 1990 Le contrat naturel. Francois Bourin
Serres, M. 1991 Le tiers-instruit. Francois Bourin
Sinha, C. 1988 Language and representation. Harvester・Wheatsheaf
竹内芳郎 1981 文化の理論のために 岩波書店
竹内芳郎 1984 現代哲学思潮への一発言 思想, 4月 岩波書店
竹内芳郎 1985 言語・その解体と創造 筑摩書房
ワロン, H., 波多野完治(監訳) 1983 ワロン選集 上 大槻書店
吉田章宏 1987 学ぶと教える 海鳴社

(博士後期課程)